

個体間の同一性を断定するトートロジー

À propos des énoncés tautologiques qui affirment l'identité entre deux individus

酒井 智宏
SAKAI Tomohiro

論文抜刷

東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集

Résonances 第4号(2006年度)

2006年9月15日発行

個体間の同一性を断定するトートロジー

酒井 智宏

1

本論文の目的¹

自然言語にはトートロジーと呼ばれる現象がある。自然言語におけるトートロジーとは、論理学における恒真式(tautologie)に類似した形式を持つ自然言語の表現のことである。次の(1a)、(2a)はそれぞれ命題論理の恒真式(1b)、(2b)に類似しており、(3a)、(4a)は述語論理の恒真式(3b)、(4b)に類似している²。したがって、(1a)～(4a)は自然言語におけるトートロジーの例である。

- (1) a. La porte est soit ouverte, soit fermée.
b. $p \vee \neg p$
- (2) a. Quand c'est fini, c'est fini.
b. $p \rightarrow p$
- (3) a. Je sais (tout) ce que je sais.
b. $\forall x [S(j, x) \rightarrow S(j, x)]$
- (4) a. François Mitterrand est François Mitterrand.
b. $m = m$

以下では、自然言語におけるトートロジーを単にトートロジーと呼ぶ。

この論文の目的は、フランス語のトートロジー X ÊTRE Xのうち、個体間の同一性を断定する用法を分析することである。分析の対象となるのは、藤田(1988)が用法Cと呼ぶ(5)のようなトートロジーの用法である。

- (5) (私は長い間行方不明だった)Olive, ma chérie! Rassure-toi! Je n'ai pas tout à fait la même figure, mais *je suis bien moi!* Embrasse-moi! (Christie: *Destination inconnue*)

ここでは目の前にいる人物とOliveの夫とが同一人物であることが主張されている。仮に夫がPierreであるとすると、(5)のトートロジーの部分は(6)と同じ解釈を受ける。

- (6) Je suis bien Pierre.

トートロジーのこうした用法は多かれ少なかれ周辺的な用法とみなされ、藤田(1988)以来目立った研究がない。特に注目すべきは、言語内論証理論と呼ばれる特殊な理論に依拠する大久保(2000)の研究である。この研究は藤田(1988)の10年以上後に発表されたものである

にもかかわらず、トートロジーと矛盾文に関して、「本稿の目的は[...]これらの発話が[...]『言語に内在する論証』という観点に基づいて正しく記述され、それがこのような見地による言語現象の記述の適切性を裏付けるものとなることをしめすことである」(大久保2000: 23)と述べながら、藤田(1988)の用法Cに全く言及すらしていない。これは、トートロジーの理論を評価するのに、当該の理論が用法Cを説明できるかどうかは無関係であると述べているに等しい。しかしながら、他の条件が同じならば、用法Cを説明できない理論よりも説明できる理論の方がすぐれていると評価されるのは当然であり、この論文ではその可能性を追求する。

分析に用いる理論は認知意味論の理論の一つであるメンタル・スペース理論(Fauconnier 1984, 1997)の拡大版(Sakai 2004a)であるが、この理論は、理論内部的な特殊概念をほとんど用いないため、ここで提示される分析は他の枠組みによる分析に対しても何らかの示唆を与えるものと考えられる。この理論的枠組みによると、個体間の同一性を断定するトートロジーは、談話領域に属する二つのスペースの要素がコネクターによって結合されることを断定する。これは、談話領域の要素と一般的知識領域の要素を結合するコネクターを断定する差異否定型トートロジー(酒井2006)と対照的である。

2

藤田(1988)の分析とその問題点

本節では、(5)のタイプのトートロジーに関するほぼ唯一の先行研究である藤田(1988)を批判的に検討する。藤田はトートロジーを大きく5つに分類し、それぞれを詳細に分析しているが、5種類のトートロジーの分析すべてに共通するのは、 p と p' の対立という概念である。X ÊTRE Xという発話には、Xの内部に(p, p')の対立が構築されるものと、Xと内部と外部にまたがる形でこの対立が構築されるものがあり、(5)は後者のタイプに属する。こうした(p, p')の対立に基づく藤田の分析はいくつかの理論的な問題を引き起こす。

2.1 藤田(1988)

藤田によると、(5)のタイプのX1 ÊTRE X2では、(p, p')の対立は $X(=p)$ と X の外、例えばY、Zなどの別の項($=p'$)との間に立てられる。(5)では本物の夫 p と別人 p' との対立が問題となっており、(5)の話

¹ 本論文は日本フランス語フランス文学会2004年度秋季大会(2004年10月2日、北海道大学)における口頭発表(酒井2004b)に基づいている。

² (1b)～(4b)において、 p は命題定項、 j および m は個体定項、 S は述語定項を表すものとする。

し手は自分がpであってp'でないことを断定する。藤田によると、このタイプのX1 ÊTRE X2(ただしX1 = X2)は次のように解釈される。

- (7) a. 主語X1:(p, p')の対立が構築可能な差異化可能なXを表す。
- b. 属詞X2:p'を排除して差異化されたX(= p)を表す。
- c. コピュラÊTRE:X1をX2に関係付け同定する。

これは(5)の直感的な解釈をある程度形式的に述べたものであると考えることができる。すなわち、(5)は「夫である(= p)可能性と夫でない(= p')可能性の両方が考えられる人物Xが、実は夫(= p)にはかならない」と断定しており、この断定は、二つの要素間の関係付けなし同定を含むので、コピュラÊTREによって表現される。

藤田は(5)をトートロジーの用法Cと呼んでいるが、藤田によると、用法Cは用法Dと呼ばれるトートロジーの上位用法である。トートロジーの用法Dとは、(8)のような発話を指す。

- (8) Dans ce film, Hitchcock est Hitchcock.
(解釈: ヒッチコックがヒッチコックの役を演じている)

(8)は、現実世界のヒッチコックと映画の登場人物としてのヒッチコックを関係付けている。メンタル・スペース理論ではこれをスペースと呼ばれる局所的領域間の対応と考える。それによると、(8)は現実スペースの要素と映画スペースの要素を関係付けている。藤田によると、二つのスペースが介在する点を除き、(8)の解釈は(5)の解釈と同様である。(8)の解釈は(9)のように表される。

- (9) a. 主語X1:別のスペースを介在させることにより(p, p')の対立が構築され、X1は差異化可能なXを表す。
- b. 属詞X2:p'を排除して差異化されたX(= p)を表す。
- c. コピュラÊTRE:X1をX2に関係付け同定する。

(9)と(7)を比べれば分かります。用法Dは用法Cと実質的に同一であり、唯一の相違は、用法Dにおいては(p, p')の対立が現実スペースとは異なるスペースの介在により構築されるという点である。すなわち、用法Dは用法Cが持つ性質をすべて持ち、かつ独自の性質を持っている。この意味で、用法Dは用法Cの下位用法である。

2.2 問題点

前節で紹介した藤田(1988)の分析には5つの問題点がある。

— 2.2.1 (p, p')の対立とX1の指示対象 —

第一の問題は(p, p')の対立に関するものである、すでに見たように、トートロジーの用法Cでは、この対立はXとXの外に構築される。すなわち、X = pであり、non-X = p'である。藤田はX1の指示対象が「(p, p')の対立が構築可能な差異化可能なX」であるとしているが、p'がXの外にある以上、これは奇妙である。p'はnon-Xであるから、X1がp'と同定されることは初めからあり得ない。X1はpとのみ同定可

能であり、p'と同定されることはない。藤田が理論化しようとしたのは、(5)が「夫である(= p)可能性と夫でない(= p')可能性の両方が考えられる人物Xが、実は夫(= p)にはかならない」という意味を持つという直感である。この直感自体は正しいが、藤田はその理論化に失敗している。藤田の理論装置では、X = p、non-X = p'と定められているから、名詞句Xの指示対象は、理論上pでしかあり得ず、Xの指示対象がp'である可能性を仮定する理論化は、内的矛盾に陥っていると言える。

— 2.2.2 コピュラの機能 —

第二に、コピュラÊTREが異なる二つのものを「関係付け同定する」というのは奇妙である。藤田によると、X1は「差異化可能なX」を表し、X2は「差異化されたX」を表すから、X1とX2は異なるものを表しており、コピュラはこれらに関係付け同定していることになる。Fauconnier(1984)の言うように、一般にコピュラは関係付け機能を持ち、同定はその機能の特殊ケースである。Fauconnier(1984: 184)は(10)の例によりコピュラの機能の多様性を示している。

- (10) a. Platon, c'est le livre rouge : Homère c'est le livre noir.
(connecteur « écrivains → livres »)
- b. L'ulcère, c'est Jean-Claude. (« maladie → patients »)
- c. Nous, c'est la première maison sur la droite.
(« personnes → logement »)
- d. Moi, c'est la tarte à l'oignon ; la quiche, c'est lui.
(« clients → plats commandés »)
- e. Les avions, c'est Marcel Dassault.
(« produits → fabricants »)
- f. Dans ce tableau, Lisa c'est la fille aux yeux bleus.
(« modèle → représentation » - connecteur image)
- g. Dans ce film, Cléopâtre c'est Liz Taylor.
(« personnages → acteurs » - connecteur drama)

したがって、コピュラが二つの異なるものを結びつけること自体には問題は無い。しかし、用法Cのコピュラは個体の同一性を断定するから、コピュラはここでは同定機能を持つはずである。ところが、藤田によると、X1は「差異化可能なX」を表し、X2は「差異化されたX」を表すから、X1とX2は異なるものを表していることになる。これは個体の同一性を断定する用法Cの意味論を正しく捉えているとは言えない。

— 2.2.3 主語名詞句の解釈 —

第三に、藤田の理論的枠組みでは、個体の同一性を表すコピュラの主語の解釈が常に属詞に依存することになり、語彙情報だけではその解釈が決定できない。これは構成的意味論の観点から見て大きな問題を引き起こす。この点を少し詳しく説明しよう。(7a)が示すように、藤田の枠組みでは主語X1の指示対象の定義が(p, p')の対立に言及している。ここで問題となるのは、pの値である。(p, p')の対立は藤田の分析の屋台骨であるが、pは変数に過ぎず、具体的な文脈でその値を指定される必要がある。pの値が定めれば、p'は「pでない

もの(non-p)」という値を割り当てられ、(p, p')の対立が具体的な値を持つことになる。ここで、(7b)より、pはX2の指示対象である³。このとき、pの値をX2に言及せずに決定することは不可能であることが判明する。例文(11)を考えてみよう⁴。

(11) Jean est Pierre. (解釈:ジャンとピエールは実は同一人物だ)

藤田の枠組みでは、(11)の各要素は次のように解釈されることになる。

- (12)a. 主語 Jean: (p, p')の対立が構築可能な差異化可能なJeanを表す。
- b. 属詞 Pierre: p'を排除して差異化されたPierre(= p)を表す。
- c. コピュラÊTRE: X1をX2に関係付け同定する。

(12b)より、Pierre = pであるから、これを(12a)に代入して変数を消去すると、(13)が得られる⁵。

- (13)a. 主語 Jean: (Pierre, non-Pierre)の対立が構築可能な差異化可能なJeanを表す。
- b. 属詞 Pierre: non-Pierreを排除して差異化されたPierreを表す。
- c. コピュラÊTRE: X1をX2に関係付け同定する。

(13a)が示すように、この枠組みでは、コピュラ文の主語の指示対象が属詞に依存して決定される。(11)の属詞を変更した(14)を考えてみる。

(14) Jean est Louis. (解釈:ジャンとルイは実は同一人物だ)

(14)の各要素は(15)のように解釈され、(13)にならって変数を消去すると、(16)のようになる。

- (15)a. 主語 Jean: (p, p')の対立が構築可能な差異化可能なJeanを表す。
- b. 属詞 Louis: p'を排除して差異化されたLouis(= p)を表す。
- c. コピュラÊTRE: X1をX2に関係付け同定する。
- (16)a. 主語 Jean: (Louis, non-Louis)の対立が構築可能な差異化可能なJeanを表す。
- b. 属詞 Louis: non-Louisを排除して差異化されたLouisを表す。
- c. コピュラÊTRE: X1をX2に関係付け同定する。

(16a)と(13a)を比べると、(11)と(14)とで主語の固有名詞Jeanに割り当てられる指示対象が異なることが分かる。これは、藤田の枠組みでは、コピュラ文の主語名詞句の指示対象がその名詞句の語彙情報だけでは決定できず、常に属詞に依存して変動することを示している。これまでの言語理論においてこのような名詞句の文脈依存性が仮定されたことはなく、こうした文脈依存性は直感にも反している。そこで、藤田の理論が正当化されるためには、名詞句の文脈依存性に関するきわめて強い経験的証拠が要請されるが、藤田はそうした証

拠を挙げていない。また、(13a)や(16a)に見られる名詞句の文脈依存性の根源は、藤田が提案する(p, p')の対立という概念である。ところが、(p, p')の対立はトートロジーの分析のために開発された概念であり、トートロジー以外の言語現象への適用可能性は明らかでない。さらに、2.2.1節と2.2.2節における議論から分かるように、この概念は本節で指摘した問題点とは独立の問題点を抱えている。ゆえに、(p, p')の対立という概念は再考されるべきであり、そこから生ずる主語名詞句の文脈依存性は正当化されない。経験的にも理論的にも、(7a)、(7b)のような指示対象の決定方法は妥当でないと言える。望ましい解決方法は、主語Xの指示対象を、単にpとすることである。例えば、(11)においても(14)においても、固有名詞Jeanの指示対象を人物Jeanとすることである。第一の問題点において述べたように、X1がp'と同定されることは初めからあり得ないから、X1の指示対象はpにのみ言及すればよい。したがって、藤田の理論における(p, p')の対立という概念は廃棄されることが望ましい。実際、次節で提示する本論文の分析では、名詞句Xの指示対象が个体xであるという単純な指示対象の割り当てが仮定されている。

— 2.2.4 有意味性と否定 —

第四の問題点は、(5)のタイプのトートロジーの有意味性に関するものである。トートロジーには恒真命題を表すものとそうでないものがある(Sakai 2004a)。(5)は「目の前にいる人物は聞き手の夫である」という有意な命題を伝達する。すなわち、第1節において見たように、ここでは(17a)は(17b)と同じ命題を伝達するものと解釈される。

- (17) a. Je suis bien moi.
- b. Je suis bien Pierre.

目の前にいる人物がピエールであるという命題は恒真命題ではなく、その真偽は言語外的現実依存する。そのため、(5)の聞き手、つまりピエールの妻は、(5)の発話の正しさを疑うことができる。この点では藤田の観察は妥当である。しかし、(17a)とそのパラフレーズである(17b)とでは言語的なふるまいが異なる。(18)の対比が示すように、(17b)に対応する否定文は存在するが、(17a)に対応する否定文は存在しない。

- (18) a. #Je ne suis pas moi. (意図された解釈: (18b)の解釈)
- b. Je ne suis pas Pierre.

藤田はこの事実気付いておらず、藤田の分析には(18)に見られる対比を説明する道具立てが存在しない。一般に有意な命題を表す文は否定文にすることができるから、(5)が有意な命題を表していながら否定できないという事実は理論的説明を要する。

— 2.2.5 用法Dとの関連 —

第五の問題点は、(5)のタイプのトートロジー、すなわち用法Cのトートロジーと、用法Dのトートロジー(8)との関連についてのもので

³ 藤田(1988: 24)には「p (= X2)」という表記が見られる。
⁴ これはモンタギュー意味論の分析対象となったタイプの文である。
⁵ 上で見たように、この用法のトートロジーにおけるp'は「pでないもの(non-p)」を指す。

ある。2.1節で見たように、藤田は用法Dが用法Cの下位用法であると考えている。これが正しければ、用法Dのトートロジー(19b)は用法Cのトートロジー(19a)が持つすべての性質を持ち、かつ独自の性質を持つと予測される⁶。逆に言えば、(19a)は(19b)を包摂すると予測される。

- (19)a. Je suis bien moi.
b. Dans ce film, je suis moi. (解釈:私は私の役を演じる)

ところが、この予測は成り立たない。まず、(19a)と異なり(19b)は否定できる。

- (20) Dans ce film, je ne suis pas moi. (解釈:私は私の役を演じない)

次に、(19a)を日本語に直訳すると不自然であるが、(19b)は直訳が可能である。

- (21)a. #僕は確かに僕だよ。
b. この映画では、僕は僕だ。

(19a)に対応する自然な日本語は例えば(22)であり、ここではトートロジーの形式は用いられていない。

- (22) ほう、僕だよ。(覚えているかい?)

以上から、用法Cは用法Dには見られない制約を持つことが分かる。こうした事実は藤田の枠組みでは説明できない。用法Cに対して「否定は不可能」という指定を与えると、その下位用法である用法Dにもこの性質が伝播し、用法Dも「否定は不可能」という指定を持つことになるが、これは事実と反する。また、用法Cに関して「日本語への直訳は不可能」という観察を行うならば、この観察は用法Dに関しても当てはまるはずであるが、これも事実と反する。これらの事実を見る限り、用法Cが用法Dの上位用法であると考えべき理由はない。

3 拡大メンタル・スペース理論による説明

本節では、拡大メンタル・スペース理論の枠組みで、用法Cと用法Dのトートロジーの分析を提示する。

3.1 拡大メンタル・スペース理論

拡大メンタル・スペース理論とは、従来のメンタル・スペース理論(Fauconnier 1984, 1997)に一般的知識領域と発話状況を付け加えたものである(cf. 坂原1996/2000, 東郷1999, 酒井2000)。従来のメンタル・スペース理論と同様、言語表現の意味は、領域間の結合と情報転送により説明される。このモデルでは、Fauconnier(1984, 1997)の言うメンタル・スペースは談話領域に包含される。全体の図式は次のように

なる。

(23)

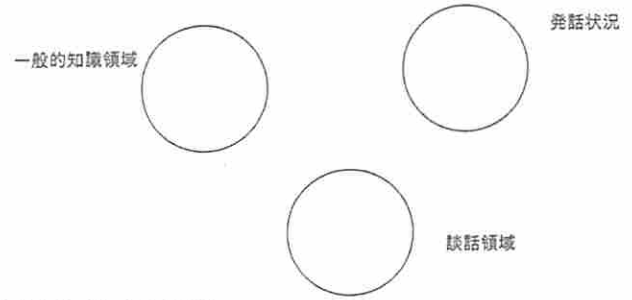


図1: 拡大メンタル・スペース理論

一般的知識領域には談話の前から知っている要素とその属性が格納される。発話状況には発話の現場に存在する要素とそれらに関する情報が格納される。談話領域には言語的に伝達される要素とそれに関する情報が格納される。すべての言語情報はまず談話領域に書き込まれる。

この枠組みでは、名詞句とコピュラは次のように処理される。

(24) 名詞句とコピュラの一般的解釈

- 固有名詞は一般的知識領域の要素と照合された後、談話領域に対応する要素を導入するか、談話領域の対応する要素を同定する。
- jeなどの直示表現は発話状況の要素と照合された後、談話領域に要素を導入するか、談話領域の対応する要素を同定する。
- 領域間の対応物はコネクターで結合される⁷。
- コピュラは(多くの場合)複数の領域間の要素を結合する。

3.2 スペース間同一性の解釈

前節で概観した枠組みで、まず(6=25)のコピュラ文の解釈を記述してみよう。

- (25) Je suis bien Pierre. (解釈:私は(君の知っているあの)ピエールだ)
(26)a. 主語 je: 発話状況の要素Xiを記述し、対応する要素x(C1(Xi) = x)を談話領域に導入する⁸。
b. 属詞 Pierre: 一般的知識領域のXを記述し、談話領域(過去スペース)に対応する要素x'(C2(X) = x')を導入する。
c. コピュラ être: xとx'とを結合するコネクターC3を設定する。

これを図示すると次のようになる。ここで、M1とM2はいずれも談話領域に包含されるものとする。

⁶ 2.1節で見たように、藤田は、異なるメンタル・スペースが存在することが用法Dの独自の性質であり、これ以外の点では、用法Cと用法Dは本質的に同一の用法であると考えている。

⁷ コネクターにはさまざまなものがあるが、それについてはここでは議論しない。以下では、特に断らない限り同一性コネクターが設定されるものとする。

⁸ 一般にC(x) = yという表記は要素xと要素yがコネクターCによって結合されることを表す。コネクターには便宜上番号を付けてある。

(27)

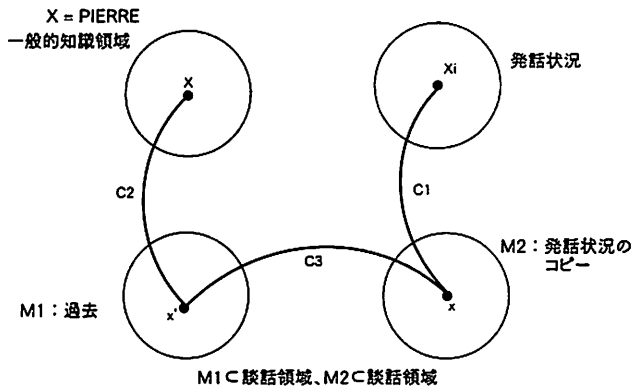


図2: Je suis bien Pierre.

このスペース構成は結果として発話状況の要素Xiと一般的知識領域の要素Xとが同一であることを表している。すなわち、目の前にいる人物と、以前から知られているPierreという人物が同一人物であるということであり、(25)の意味を正しく捉えている。この定式化から明らかのように、(25)は有意味な命題を表しており、(25)を否定することは、コネクター C3を否定することに等しい。このため、(18b)のような否定文が可能となる。

3.3 用法Cのトートロジーの解釈

本論文の主題である用法Cのトートロジー(28)は(29)のように解釈される。

(28) Je suis bien moi. (解釈: (25)と同様)

- (29)a. 主語 je: 発話状況の要素Xiを記述し、対応する要素 x (C1 (Xi) = x)を談話領域に導入する。
 b. 属詞 moi: 発話状況の要素Xiを記述し、コネクターC4に基づくアクセス原則により一般的知識領域の要素Xを同定し、C2によって談話領域(過去スペース)に対応する要素x'を導入する。
 c. コピュラ être: xとx'とを結合するコネクターC3を設定する。

(29b)にあるアクセス原則とは、メンタル・スペース理論の根幹を成す原則であり、次のように述べられる。

(30) アクセス原則 (Fauconnier 1997): 二つの要素 a と b がコネクター F によってリンクされているならば (b = F (a)), 要素 b をその対応物 a の名前か、記述か、指差しかによって同定することができる。

次の図が示すように、ここでは発話状況のXiと一般的知識領域のXがコネクター C4で結合されているので、アクセス原則により、Xiの記述 moiにより一般的知識領域のXが同定できることになる。

(31)

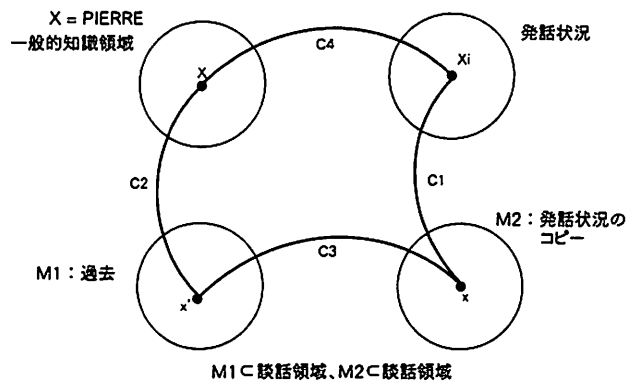


図3: Je suis bien moi.

(26c)と(29c)の同一性が示すように、(25)と(28)の断定は同一であり、いずれも目の前の人物Xiと以前から知られている人物X (= Pierre)との同一性を伝達している。しかし、両者の前提は異なる。(28)は(25)と異なり、属詞の解釈にコネクター C4が必要であり、C4が利用可能な文脈で発話されない限り意図された解釈を持ち得ない。ところが、C4が利用可能であるとき、コピュラが断定するコネクターC3は新情報をもたらさない。C4が利用可能であれば、主語と属詞が解釈された段階でxとx'との同一性は自動的に導かれるからである。すなわち、(28)は前提が断定を合意するという語用論的に特殊な発話であり、これが(28)をマージナルなものにしている。

この事実によって(28)に対応する否定が存在しないことが説明できる。一般に否定は文の断定にのみ影響し、文の前提は保持する。(28)の解釈において、コネクター C4は文の前提に対応し、コネクター C3は文の断定に対応する。そこで、(28)を否定すると、C4は保持され、C3の存在が否定されることになる。しかし、C4とC3がともにxとx'との同一性に関わる以上、C4を肯定しながらC3を否定するのは矛盾である。自然言語には矛盾を排除する一般原則があるため、(18a = 32a)のような発話は存在し得ないと予測される。

- (32)a. #Je ne suis pas moi. (意図された解釈: (32b)の解釈)
 b. Je ne suis pas Pierre.

一方、前提が断定を合意する発話は排除こそされないが、正常な情報構造ではないので、これを避ける言語があっても不思議はない。日本語において(28)に対応するトートロジー(21a = 33)が不自然になるのはこのためであると考えられる。

(33) #僕は確かに僕だよ。

3.4 用法Dとの関連

用法Dのトートロジー(8 = 34)は(35)のように解釈され、これは

(36)のように表される(cf. Sakai 2005)⁹。

(34) Dans ce film, Hitchcock est Hitchcock.

(解釈: ヒッチコックがヒッチコックの役を演じている。)

(35)a. 主語 Hitchcock: 一般的知識領域の要素Xを記述し、対応する要素xを談話領域に導入する。

b. 属詞 Hitchcock: 一般的知識領域の要素Xを記述し、合成コネクターCIMOCIによる対応物x'を談話領域に導入する。

c. コピュラ: xとx'を結合するコネクターCDを設定する。

(36)

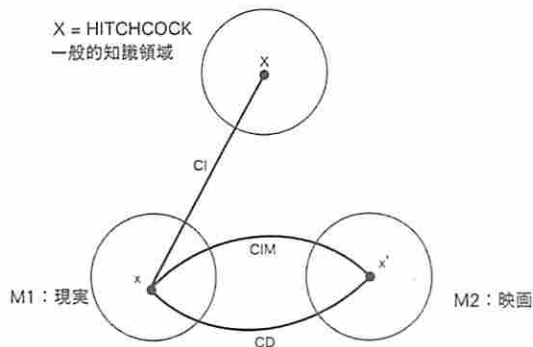


図4: Dans ce film, Hitchcock est Hitchcock.

(28)と(34)のコピュラは談話領域の要素間を結合するコネクターを設定するという点では共通の機能を有しているが、設定されるコネクターが異なる。(28)ではコピュラは同一性コネクターを設定しており、二つの個体の同一性を断定しているが、(34)ではコピュラはドラマコネクターを設定しており、二つの個体が「俳優-役」の関係にあることを断定している。一般にドラマコネクターを同一性コネクターに還元することはできず、その逆も不可能である(Sakai 2005)。この点で、(28)と(34)の間にはいかなる包摂関係もなく、一方が他方の下位用法であると考えるのは不適切である。そうではなく、(28)と(34)とをともに包摂する抽象的なスキーマ、すなわち談話領域の要素間を結合するスキーマが存在すると考えるのが妥当である。また、(34)では前提が断定を含意することはないから、語用論的に正常な発話であり、否定や他の言語への翻訳が可能である。

4 結論

この論文で論じたことは次の通りである。まず、用法Cのトートロジーにおいて、主語、属詞、コピュラのいずれも一般原則が予測する範囲内で解釈され、その分析に際して藤田(1988)のように(p, p')の対立といった特殊概念を仮定する必要はない。

次に、用法Cのトートロジーと用法Dのトートロジーはともに談話領域間結合のスキーマによって包摂され、両者の間には包摂関係は成り立たない。用法Cのトートロジーは前提が断定を含意するという点で語用論的に特殊な発話であるが、用法Dにはそうした特殊性は

認められない。否定が不可能である、日本語への翻訳が困難である、といった用法Cの周辺のステータスはこの語用論的特殊性に起因している。

以上の定式化により、藤田(1988)の分析が抱える問題点をすべて克服することができ、かつ個体間の同一性を断定するトートロジーを一般理論の枠組みで適切に扱うことができる。

付記:本研究は平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費、研究課題:条件節・譲歩節とトートロジーの解釈スキーマ(18・5930))の助成を受けて行われた。

参考文献

Fauconnier, Gilles (1984), *Espace mentaux: Aspects de la constructions du sens dans les langues naturelles*, Paris: Minuit. (『メンタル・スペース』坂原茂他訳、白水社、1996年)。

Fauconnier, Gilles (1997), *Mappings in thought and language*, Cambridge: Cambridge University Press. (『思考と言語におけるマッピング』坂原茂・田窪行則・三藤博訳、岩波書店、2000年)。

藤田知子(1988)、「Une femme est une femme - X ÊTRE X構文解釈の試み」『フランス語学研究』第22号、日本フランス語学会、15-34ページ。

大久保朝憲(2000)、「擬似同語反復文と擬似矛盾文」『文学論集』第49巻4号、関西大学、23-40ページ。

坂原茂(1996/2000)、「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知科学』3-3、日本認知科学会、38-58ページ、坂原茂編『認知言語学的发展』、ひつじ書房、213-249ページ。

酒井智宏(2000)、「名詞句の探索領域とコピュラ文の疑問形」『言語情報科学研究』第5号、東京大学言語情報科学研究会、143-169ページ。

SAKAI, Tomohiro (2004a), *Connexions trans-spatiales et énoncés tautologiques en japonais*, 博士論文、パリ第8大学。

酒井智宏(2004b)「トートロジーの周辺の用法について」、日本フランス語フランス文学会2004年度秋季大会口頭発表、2004年10月2日、北海道大学。

SAKAI, Tomohiro (2005), « On tautologies of the type Hitchcock is Hitchcock in Japanese », [KLS]25, 関西言語学会、359-369ページ。

酒井智宏(2006)「差異否定型トートロジー」、『認知言語学論考』第5号、ひつじ書房。

東郷雄二(1999)「談話モデルと指示: 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」『総合人間学部紀要』第6号、京都大学、35-46ページ。

⁹ CI: 同一性コネクター、CIM: イメージコネクター、CD: ドラマコネクター、M1 c 談話領域、M2 c 談話領域

À propos des énoncés tautologiques qui affirment l'identité entre deux individus

SAKAI Tomohiro

Cet article a pour objectif de formuler, dans le cadre de la théorie étendue des espaces mentaux, l'interprétation des énoncés tautologiques *X est X* du type (1), que Fujita (1988) appelle l'emploi C.

- (1) Olive, ma chérie ! Rassure-toi ! Je n'ai pas tout à fait la même figure, mais *je suis bien moi* ! Embrasse-moi !
(Christie, *Destination inconnue* : 103)

Cet emploi de *X est X* concerne l'identité de X et affirme que le premier X est identique au deuxième X. Comme le fait remarquer Fujita (1988), l'énoncé *je suis bien moi* en (1) se paraphrase comme en (2).

- (2) Moi qui suis là ne suis pas un autre que moi-même, je suis celui que je prétends être.

Si, par exemple, le locuteur de (1) prétend être Pierre, l'énoncé *je suis bien moi* en (3a) est synonyme de (3b).

- (3) a. Je suis bien moi.
b. Je suis bien Pierre.

Fujita fait appel à l'opposition entre p et p' pour rendre compte de l'interprétation de (1). Dans l'emploi C des énoncés tautologiques *X1 est X2*, où X1 et X2 sont identiques, l'opposition (p, p') se trouve entre X et non-X. L'opposition en (1) est illustrée en (4).

- (4) a. p = moi
b. p' = quelqu'un d'autre que moi

Du point de vue de la sémantique compositionnelle, X1 dénote « moi qui suis là », à savoir le X différenciable qui construit l'opposition (p, p'), et X2 dénote p, à savoir le X différencié de p'. La copule identifie les deux objets.

Fujita soutient que l'emploi C subsume l'emploi D, exemplifié en (5).

- (5) Dans ce film, Hitchcock est Hitchcock.
(Sens : Hitchcock interprète le rôle de Hitchcock.)

La seule différence entre (3a) et (5) est que dans ce dernier un autre espace entre en jeu, en l'occurrence un espace drama au sens de Fauconnier (1984).

L'analyse que présente Fujita rencontre au moins quatre diffi-

cultés. Le premier problème concerne le lieu de l'opposition (p, p'). L'argumentation de Fujita n'est pas claire sur ce point. D'une part Fujita dit que cette opposition se situe entre X et non-X, d'autre part elle dit que le X1 dénote le X différenciable, à savoir le X qui peut être identifié soit à p soit à p'. Mais si p' est non-X, comment peut-on identifier X à p' ? L'identification de X avec p' devrait être bel et bien impossible.

En deuxième lieu, les deux GN X1 et X2, selon Fujita, dénotent deux objets différents. Mais comment la copule peut-elle alors les identifier ? La théorie de Fujita semble exiger une mission impossible de la copule.

En troisième lieu, le système de Fujita ne permet pas d'interpréter le nominal sujet de la phrase copulative sans faire référence à l'attribut, ce qui nécessite une dépendance contextuelle superflue pour l'interprétation du sujet.

En quatrième lieu, l'analyse de Fujita laisse la différence entre (3a) et (3b) sans explication satisfaisante. Alors que (3b) peut être nié comme en (6b), (3a) n'a pas de phrase négative correspondante, comme le montre (6a).

- (6) a. #Je ne suis pas moi.
b. Je ne suis pas Pierre.

En dernier lieu, si, comme le prétend Fujita, l'emploi D illustré en (5) était un sous-type de l'emploi C illustré en (3a), alors on devrait s'attendre à ce que l'emploi D ait toutes les propriétés de l'emploi C. Or ce n'est évidemment pas le cas. Tout d'abord, l'énoncé (5), à la différence de (3a), peut être nié comme en (7).

- (7) Dans ce film, Hitchcock n'est pas Hitchcock.
(Sens : Hitchcock n'interprète pas le rôle de Hitchcock.)

Ensuite, l'énoncé (5) peut être traduit en japonais comme en (8b) tandis que la traduction littérale de (3a) est maladroite, comme le montre (8a).

- (8) a. ??Watasi wa (tasikani) watasi da.
moi NOM (bien) moi COP
« Je suis (bien) moi »
b. Kono eiga dewa Hitchcock wa Hitchcock da.
ce film dans TOP COP
« Dans ce film, Hitchcock est Hitchcock »

Nous proposons une analyse basée sur la théorie étendue des espaces mentaux (Sakai 2004a). Dans ce cadre théorique, à côté des espaces mentaux au sens originel du terme, que nous intégrons dans le domaine du discours (DD), se représentent deux espaces supplémentaires : le domaine de connaissances générales (DCG) et la situation de l'énonciation (SE). Dans le DCG sont inscrits les éléments déjà connus et leurs propriétés vérifiées. Dans la SE sont inscrits les éléments qui se trouvent dans la situation d'énonciation. Dans le DD sont inscrites les informations véhiculées par

les expressions linguistiques. Dans ce cadre, l'énoncé (3a) est interprété comme en (9).

- (9) a. Le nominal sujet *je* signale l'élément Xi dans la SE et introduit dans le DD son correspondant x (C1 (Xi) = x).
- b. L'attribut *moi* signale l'élément Xi dans la SE et identifie l'élément X dans le DCG par le biais du principe d'accès (C4 (Xi) = X) (Fauconnier 1997) et introduit dans le DD son correspondant x' (C2 (X) = x').
- c. La copule *être* introduit le connecteur C3 qui relie x à x'.

Cette formulation, qui ne se fonde que sur les principes généraux, permet de rendre compte de la sémantique de l'emploi C des énoncés tautologiques. En (9), l'interprétation de l'attribut dépend de l'existence du connecteur C4. Or, lorsque le connecteur C4 est valide, l'introduction du connecteur C3 par la copule n'apporte aucune information nouvelle, parce que le connecteur C4 garantit déjà l'identité entre x et x'. Ceci revient à dire que dans cet énoncé la présupposition implique l'affirmation, situation pragmatiquement anormale. C'est pourquoi l'énoncé (3a) donne l'impression d'être marginal. Dans la mesure où les énoncés tautologiques de ce type impliquent une anomalie pragmatique, il n'est pas étonnant qu'il y ait des langues qui ne les admettent que difficilement. Cette anomalie distingue (3a) de (3b), qui lui est un énoncé tout à fait normal.

En (9c), le connecteur C3 qu'introduit la copule est un connecteur identité. En revanche, dans l'emploi C, illustré en (5) ci-dessus, c'est plutôt un connecteur drama (Fauconnier 1984) qui est introduit par la copule, ce qui rend incompatible la sémantique de l'emploi C et celle de l'emploi D. Il n'est donc pas justifié de considérer que l'un est un sous-type de l'autre. La solution la plus satisfaisante est sans doute de considérer que les emplois C et D sont régis par un schéma commun qui est plus abstrait : le schéma de connexion reliant deux individus.